

## 宮古島市総合博物館製作紙芝居 『戦争と子どもたちく学童そかい』

寺崎 香織 (宮古島市総合博物館学芸係)

はじめに

宮古島市総合博物館では、二〇二二(令和三)年度に紙芝居『戦争と子どもたちく学童そかい』を製作した。

当館における紙芝居の製作は、二〇一八(平成三十)年度、二〇一九(平成三十一・令和元)年度に続いて三回目となる。本稿では、二〇二二(令和三)年度に製作した紙芝居について、テーマの選定理由、内容、今後の活用予定について報告する。

### 一. テーマの選定理由

当館では過去に二回、紙芝居の製作を行ってきた。約七十年前、当時の平良市長石原雅太郎氏が行った、「三大事業」をテーマにした『平良市の三大事業』(二〇一八年製作)と、約七十年前、小学生だった「よしくん」のくらしに焦点をあてた『よしくんの少年時代』(二〇一九年度製作)である。それぞれの詳細については『宮古島市総合博物館紀要』の第二十四号と第二十六号で報告をしている。

これらの紙芝居は、ターゲットを社会科見学で来館する小学三・四年生に絞り、社会科の単元である「昔から今へと続くまちづくり」、「変わる私たちのくらし」に合わせた内容となっている。実際に社会科見学では、紙芝居を見た後で当館の第一展示室へと実物資料を観察しに行くグループと、実物資料を観察し、職員の話聞いた後で紙芝居を見るグループに分かれて見学を行うことが通常となってきた。見学スケジュールに紙芝居を組み込むことで、子どもた

ちが当時の様子をイメージしやすくなっていると感じる。

今回、三度目の紙芝居を製作するにあたり、前述の二作品で重要視された「利用頻度が高い」「親しみやすく、分かりやすい内容にする」ことに加え、対象をもう少し広げ、展示会などで公開できる内容をテーマとすることになった。これらを踏まえて一番に思いついたのは「平和展」だった。当館では、毎年五月末から六月末にかけて、六月二十三日の「慰霊の日」に合わせた特別展「平和展」を開催している。年ごとにテーマは変わるものの、戦時中の宮古の様子を伝え、平和とは何かを考えてもらおう機会をつくるという大きな目的は変わらない。

展示期間中は、平和教育の一環として、複数の小・中学校から生徒たちが当館を訪れる。先生方から「当時の宮古での様子を子どもたちに伝えたい」との意見もあり、今日の小・中学生と同じ年頃の当時の子どもたちについて、紙芝居にしたいと感じた。

一九四四(昭和十九)年八月、平良第一・第二・下地の三つの国民学校(今日の小学校)から約八十名の子どもたちが「学童疎開」を行った。初等科一年生から高等科二年生まで(今日の小学校一年生から中学校二年生)の生徒が親元を離れて約一年半の間、引率の先生らと共に集団生活を送った。当時の子どもたちの様子を紙芝居にすることで、今の子どもたちが戦争や平和について「自分事」として考えるのではないかと思った。以上のことから、学童疎開についての紙芝居を制作することになった。

二 紙芝居の内容  
一枚目…表紙



はじめまして。私の名前は下地セツ子といます。  
北小学校の卒業生で、お友達からは「せつちゃん」と呼ばれてい  
ます。

私は小学生の頃、大好きなおばあとお父さんとお母さん、2人の  
お姉ちゃんとまさ兄ちゃんの七人家族で幸せに暮らしていました。  
でも、「戦争」があつて、私の暮らしは変わってしまいました。

みなさんは戦争って知っていますか？

兵隊さんが銃や爆弾を使って、敵と戦うこと？

爆撃機がやってきて町を破壊すること？

これから皆さんに私が体験した戦争についてお話ししたいと思います。  
ます。

計 二百三十九文字



二枚目：戦前の様子（昭和のはじめ頃）

私が生まれたのは一九三五年で、そのころの宮古島はとてもどかな島でした。

砂利<sup>じやり</sup>を敷き詰めた真っ白なナウサ<sup>ノウサ</sup>道に、かやぶき屋根のカヤヤ<sup>カヤヤ</sup>、瓦ぶき屋根のカーラヤーが並んでいました。

平良の西里通りや市場には島中からたくさんの人や物が集まっています、とてもにぎやかでした。

ほら、見てください！美味しそうなお豆腐や野菜がたくさん並んでいます！

市場ではお母さんたちが着物姿やモンペ姿で買い物を楽しんでいます。よくおしゃべりを楽しんでいました。

計 二百十二文字

㊦ 石粉や砂利のこと。



三枚目：戦時中の学校（二九四一（昭和十六）年頃）



私が国民学校、今の小学校に入学した頃、日本はアメリカやイギリスと戦争をしていました。

学校では、「四大節<sup>しだいせつ</sup>」<sup>㊦</sup>という行事がとても大事にされていて、式の途中で動いたりおしゃべりする事は絶対に許されませんでした。

先生たちは、私たちが方言を話すことを良くないことだといって、方言を話している人を見つけると、その人に「方言札<sup>ほうげんふだ</sup>」という札を下げました。

方言札をかけられると、他に方言を話している人をみつけるまで下げていなければならなくて、恥ずかしい思いをしました。うちのまさ兄ちゃんをよく方言札をかけられていましたよ。

計 二百六十三文字

㊦ もと祝祭日とされた四方拝、紀元節、天長節。明治節の総称。

四方拝<sup>しほうはい</sup>：一月一日。元日の朝に行われる宮中行事

紀元節<sup>きげんせつ</sup>：二月十一日。一八七二（明治五）年に神武天皇即位の日を制定して祝日にした。現在の「建国記念の日」にあたる。

天長節<sup>てんちようせつ</sup>：昭和期は、四月二十九日。その時代の天皇誕生日を指す（平成は十二月二十三日、令和は二月二十三日）。  
明治節<sup>めいじせつ</sup>：十一月三日。明治天皇の誕生日。現在の「文化の日」にあたる。



四枚目…兵隊さんがやってきた（一九四三（昭和十八）年）

私が二年生の時、島の外から兵隊さんたちが宮古島にやってきました<sup>㊦</sup>。

島にりっぱな飛行場を作るためにきたそうです。

私たちはお国のために頑張って戦ってくれている兵隊さんたちに少しでも協力するため、おうちの石垣を崩して使ってもらいました。

大人や大きいお兄さんお姉さんたちも仕事や学校にいかずに毎日兵隊さんたちのお手伝いをしていました。

気が付くと、宮古島にはたくさん兵隊さんが来ていて、私が三年生になった頃には、大きなおうちや学校が使われるようになっていきました。

そのため、御嶽や空いているおうちを教室の代わりとして使っていました。

計 二百六十一文字

㊦ 一九四三（昭和十八）年九月より海軍飛行場（現在の宮古島空港）の設営が始まったのを皮切りに、一九四四（昭和十九）年の十二月までに陸・海軍合わせて約三万名の日本兵が宮古島に配備された。



五枚目…疎開へ（一九四四（昭和十九）年八月）



しばらくすると、より安全な場所を求めて疎開<sup>⑤</sup>をする人たちが増えてきました。

私の親友のミエちゃんは、お母さんとおばあさん、弟たちと一緒に台湾へ、隣に住むヒデ坊はおじさんがいる九州に疎開していきました。

私たちも家族で相談をして、私とまさ兄ちゃんの二人で九州へ学童疎開<sup>⑥</sup>に行くことになりました。

出発の日、「大徳丸<sup>だいとくまる</sup>」というとても大きな船に乗った私は、子どもたちだけで内地<sup>ないち</sup>にいけることがとても嬉しくて、はしゃいでいました。

でも、まさ兄ちゃんは目にいっぱい涙をためて見送る人たちをみつめていました。

私たちの名前を呼ぶお母さんやお姉ちゃんの声が、遠くから風に乗って聞こえてきました。

泣いている人たちがたくさんいたことを覚えています。

計 三百十六文字

④ 空襲・火災などの被害を少なくするため、集中している人口や建造物を分散すること。

⑤ 戦争中、児童生徒を対象にしておこなわれた集団疎開。宮古島からは、平良第一、平良第二（今日の北）、下地の三国民学校が学童疎開に行った。約八十名（生徒・引率教師とその家族を含む）。



六枚目：船の上で

宮古島を出た私たちは、沖縄本島の那覇港なはこうを通って、鹿児島へと向かいました。

途中で、船員さんたちがみんなを集めて、「もしもの時」の話をしはじめました。

「もし」敵の攻撃こうげきをうけて船が沈み始めたら、できるだけ遠くに泳ぐことや、イカダがたくさんあるからそれにつかまることを教えてもらいました。

急に不安になって泣きそうになりましたが、まさ兄ちゃんが「大丈夫、どんなときも一緒にいよう」といって、二人の腰をヒモでつないできつく結んでくれたので安心したので今でもはっきりと覚えています。

それでも、鹿児島につくまではずっと不安でした。

計 二百六十五文字



七枚目：疎開先に到着（宮崎県小林町 一九四四（昭和十九）年九月）

鹿児島についた私たちは、宮崎県的小林町<sup>⑥</sup>という所に行き、「小林青年学校<sup>⑦</sup>」に寝泊まりしながら「小林国民学校」今の小林小学校に通うことになりました。

小林町は、大きな山がそびえ立ち、川が流れて田んぼがあつて、とてもどかな町でした。

昼は学校で勉強をしたり、友達と遊んだり、楽しく過ごしましたが、夜になると、毎日のように宮古島を思い出しました。

家族の顔を思い浮かべとても寂しく不安になり、「おうちに帰りたい」と泣いてまさ兄ちゃんや先生たちを困らせました。

夜や朝方になると子どもたちのすすり泣きや、それをなぐさめる上級生と先生たちの声が部屋に響いていました。

計 二百七十三文字

⑥ 今日の小林市。

⑦ 青年学校は、小学校卒業の勤労青年に、産業実務教育・普通教育および軍事教練を施した旧制の学校。一九三九（昭和十四）年に男子の義務制が実施され、軍事教練が重視された。一九四七（昭和二十年）、廃止された。



八枚目…初めての冬



新しい生活にも少しづつ慣れてきた頃、私たちにとって初めての「冬」がやってきました。

空から舞い落ちる雪に、宮古島からきた子どもたちは興奮して、大人が止めるのも聞かずに外に飛び出し、寝転んだり手に取ったり、口に入れたり大騒ぎでした。

寒さなんて、気にならなかったのです。

でも、楽しい時間はすぐに終わり、経験したことのない寒さと霜焼け<sup>しもやけ</sup>に苦しめられることになりました。

まさ兄ちゃんも霜焼けで足がパンパンに腫<sup>は</sup>れて靴もはけず、地元の人たちにももらったわらじをはいて、泣きながら学校に通ってました。

夜は三・四人で一つのお布団をかぶってくっつき合って眠りました。

計 二百七十五文字

④ 強い寒気にあたって局所的に生じる軽い凍傷。赤くはれて痛がゆくなることが多い。霜朽ち。霜腫れ。

九枚目…ひもじい



小林町では宮古島では食べられない白いお米や地元の野菜などを食べることができたので、ご飯の時間がとても楽しみでした。でも、だんだんと、配られる食べ物の数が減っていききました。地元の子どもたちのおうちにはほとんどが農業をされていて、お米やお芋、麦や粟が敷き詰められたお弁当箱を持ってくるのに、私たち宮古島の子どもたちのお弁当にはほんの少しのお米とお芋しか入っていませんでした。

学校に行くときにカバンの中でコロコロところがって、お弁当を開けたら小さなボールのようになっていたので、とても恥ずかしく、周りの子たちに見られたくなくて、手で隠しながら食べました。私たちはずっとおなかをすかせていました。

計 二百九十二文字



十枚目…沖縄戦の始まり（一九四五（昭和二十）年四月～六月）

ある日、学校に行くと「沖縄に敵が上陸したんだって！」と新聞を見たり、大人たちの噂を聞いた子どもたちが大騒ぎをしていました。

とてもショックだったのを覚えています。

「宮古はどうなったんだろう」「家族は無事なのかな」いろんな思いで心がつぶれてしまっそうでした。

たまに届いていたお母さんからの手紙や荷物は、全然届かなくなり、心配でたまらなくなって出した手紙にも、返事が来ることはありませんでした。

小林町にも兵隊さんがやって来て<sup>⑨</sup>、私たちの寝泊まりしていた小林青年学校で一緒に生活することになりました。

計 二百四十五文字

⑨ 一九四五（昭和二十）年三月、満州に駐屯していた陸軍の第二十五師団の転用が決まり、四月には本土決戦に備えて宮崎県小林町へ移駐した。



十一枚目…赤痢



小林町に兵隊さんたちがきてしばらくたった頃、兵隊さんの一人が赤痢<sup>④</sup>という病気になってしまい、同じ場所で生活をしている私たちの仲間も二人、赤痢にかかってしまいました。先生は二人を別の部屋に移動させて、つきっきりでお世話をしました。私たちにうつってしまったら大変だと、顔を見ることすらも許されませんでした。

でも、夜になるとみんなで交代しながらこっそり部屋を抜け出して、二人の部屋に行つて話しをしたり、背中をさすったりしました。赤痢にかかった二人は、どんどん痩せ細って髪の毛も抜け落ち、骨と皮だけになって、私たちはとても心配しました。

やっと元気になって、二人が部屋に戻ってきたときには、みんなで抱き合つて泣きました。

計 三百四文字

④ 法定伝染病の一つ。夏季に多く、発熱、腹痛、粘液・血液・膿の混じった下痢の頻発を特徴とする。菌は、衛生環境の悪いところに滞在し、汚水や蠅などから伝播する。



十二枚目…終戦（一九四五（昭和二十）年八月）

毎日を必死に生きていく中で、一九四五年八月十五日、終戦の日を迎えました。

その日はとても暑かったのを覚えています。

先生から「大事な話があります」と言われ、日本が戦争に負けたことを知りました。

「日本は絶対に負けない国だ」と小さい頃から教えられ、お国のために過ごしてきたので、「負けた」と理解するまでに時間が必要でした。

先生や大人の人たちは泣いていたのですが、私たち子どもは「へ」と聞いていました。

喜ばいいのか悲しめばいいのかわかりませんでした。

戦争は終わっても、すぐに宮古島に帰ることはできなかったのです。小林町の人たちの畑の端っこや、道の脇の方に野菜や小麦を植えて、みんなで助け合って暮らしました。

計 二百九十九文字





十三枚目…本当の「終戦」(一九四六(昭和二十二年二月))

戦争が終わって半年たったころ、やっと宮古島に帰れることになりました。

一九四六年二月。宮古島を離れて一年半。

夢にまで見ていたふるさとの地によりやく足を下ろすことができませんでした。

港には出迎えの人たちがたくさんあふれかえっていて、それぞれが家族を捜し求めひしめき合っていました。

「会いたい！」

そう強く思いながらお母さんの姿や声を探して目をこらし耳を澄ましている

「せつこ！まさ坊！！」「いた！生きていた！！」

船から降ろしてくれるおじさんから奪うようにまさ兄ちゃんと私を引っ張り上げる人がいました。強く抱きしめてくれたのは、大好きなお母さんでした。

みんなで抱きしめ合い泣き崩れました。それが私の戦争が終わった瞬間でした。

私たちが疎開に旅立ってから、宮古島は毎日空襲に見舞われたそうです。お父さんは兵隊さんになって宮古を守り、お姉ちゃん達は陸軍病院で看護師さんたちのお手伝いをし、お母さんとおばあは、毎日敵の攻撃から逃げ回っていたそうです。そのうちおばあはマリアにかかって、防空壕の中で苦しみながら死んでしまったとお母さんから聞かされました。優しくおばあがとても恋しく、生きて会いたかったと悔しくて寂しくて涙が止まりませんでした。

計 五百十二文字





十四枚目…おわりに (表紙に戻る)

私の体験した「戦争」は、特別なものではありません。当時誰もがそれぞれの戦争を体験しました。

「命」の大切さ、「家族」の大切さ、「何気ない日常」のありがたさを思い知りました。

戦争が二度と起こらないよう、あとき願った平和を忘れないよう、私は語り続けます。

今、皆さんのいる世界は平和ですか？戦争の足音は聞こえていますか？

計 百五十八文字

### 三、紙芝居の今後の活用予定

来年度は、今回制作した紙芝居を含め三つの紙芝居をデジタル化し、複製を製作する予定である。予算や日程の調整がつかず、バスの借用等が難しいため当館への来館をあきらめる学校があることを知り、いずれは貸し出しができるような形にしたいと企画した。学校で見た紙芝居をきっかけに、家族と博物館に来館する子どもたちもいるかもしれない。

また、二〇二四(令和六)年度の平和展は、今回の紙芝居と同じタイトル「戦争と子どもたち」学童そかい」で、平和展を開催する予定である。紙芝居の中の世界を展示に反映させていければ、子どもたちにも分かりやすく伝えられるのではないだろうか。紙芝居や展示会を見た後に戦争や平和について、語り合い、考えるきっかけとなれば幸いである。

### おわりに

今回初めて紙芝居の製作に携わり、作品を生み出す難しさを痛感した。実際に学童疎開に行った方々は、八十年代後半から九十年代半ばとなる。実際に宮古島で聞き取り調査ができたのは一名のみで、大部分は引率の先生や当時の子どもたちが記した体験談などに助けをいただいた。

しかし、調査・研究を進めていく中で、多くのご縁があり、宮崎県小林市で当時の宮古の子供たちのことを覚えていらっしゃる方にもお会いすることができた。また、当時教員として子供たちを引率した先生のご家族にもお話を伺うことができた。

今後は、宮古島内に限らず、沖縄本島、宮崎県など複数の地域での調査・研究を進めていくとともに、地域のご年配の方々からの聞

き取り調査も進めていかなければならない。

当時、実際に学童疎開に行かれた方、また、家族が行っていた方、学童疎開に行っていたご両親や祖父母から当時のことをお聞きしている方、学童疎開に行っていた知り合いより話を聞いたことがあるという方がおりましたら是非ご教示願います。

### 謝辞

紙芝居製作に際し、前里芳人氏と長濱智視氏には、度重なる打ち合わせで様々な意見交換を行い、丁寧に表示していただきました。

浦添市字小湾郷友会の手登根順治氏、外間清昌氏、宮城政司氏には、当時宮古の子どもたちと同じ宮崎県小林町(当時)の小林国民学校に学童疎開した方の資料を現在も探していただいております。

対馬丸記念館の外間邦子氏と堀切香鈴氏には、紙芝居製作のアドバイスや資料のご紹介をいただきました。

南風原町立南風原文化センターの平良次子氏には、学童疎開の調査研究についてのアドバイスや、かつて実施した学童疎開の追体験等の取り組みについてご紹介いただきました。

宮古の子どもたちが鹿児島港についてから宿泊したという話もある鶴鳴館の小山光義氏には、当時の鶴鳴館跡地をはじめ、周辺の地についてご案内・ご紹介いただきました。

戦後、宮古の子どもたちが引き揚げの前に滞在したという株式会社山形屋の楚南貴彦氏には、当時の山形屋の様子が載っている記念誌をいただきました。

小林市教育委員会の真崎勝男氏には、当時の小林の様子が分かる資料のご紹介をいただき、当時のことを知る人物のご紹介もしていただきました。

小林市立小林小学校の鶴戸周成氏には、当時の子どもたちの名前が記載されている大変貴重な資料をご紹介します。

宮崎県遺族連合会の鶴田まゆみ氏には、資料室をご案内いただき、当時の宮崎県の子どもの様子を教示いただきました。また、沖縄の学童疎開児たちや当時の学校生活について覚えているという方のご紹介もいただきました。

また、本調査にご協力いただきました宮古島市、日向市、小林市の話者の皆様には心より感謝申し上げます。貴重なお話しをお聞かせくださり、本当にありがとうございます。

ここに記してお礼申し上げます。

令和六年度には学童疎開をテーマとした平和展を開催する予定です。今後とも調査研究へのご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願いいたします。

### 参考・引用文献一覧

小林市史編さん委員会

一九六五年 『小林市史 第二巻』 小林市役所

二〇〇〇年 『小林市史 第三巻』 小林市

琉球政府

一九七一年 『沖縄県史 八 沖縄戦通史』 (株)国書刊行会

百周年記念誌編集委員会

一九七二年 『小林小学校創立 百年の歩み』 百周年記念事業協力会

宮古教育誌編集委員会

一九七二年 『宮古教育誌』 沖縄宮古連合区教育委員会

沖縄県教育委員会

一九七四年 『沖縄県史 十 沖縄戦記録二』 (株)国書刊行会

平良市史編さん委員会

一九七八年 『平良市史 第四巻 資料編二 近代資料編』 平良市役所

一九七九年 『平良市史 第一巻 通史編 先史く近代編』 平良市役所

一九八七年 『平良市史 第七巻 資料編五 民俗・歌謡』 平良市教育委員会

二〇〇五年 『平良市史 第十巻 資料編九 戦前新聞集成 下』 平良市教育委員会

沖縄大百科事典刊行事務局

一九八三年 『沖縄大百科事典 上巻』 沖縄タイムス

北小学校創立百周年記念事業期成会

一九八三年 『北小学校 百年』 浦添市史編集委員会

浦添市史編集委員会

一九八四年 『浦添市史 第五巻 資料編四 戦争体験記録』 浦添市教育委員会

百周年記念誌編集委員会

一九八五年 『平良第一小学校創立百周年記念誌』 平良第一小学校創立百周年記念事業期成会

大嶺哲雄

一九九〇年 「沖縄県における食生活と栄養に関する研究(一)―現代っ子の食と学校給食―」 『沖縄大学紀要第七号』



沖縄大学教養部

下地小学校創立一〇〇周年記念事業期成会記念誌編集委員会

一九九〇年 『下地小学校創立一〇〇周年記念誌』 下地町立下地  
小学校

仲地哲夫

一九九一年 「へ資料紹介」宮古島の社会と風俗―一九一七年―

九五〇年の地元新聞の記事を中心に― 『宮古、下地

町調査報告書(二)―地域研究シリーズNo.16―』沖

縄国際大学南島文化研究所

那覇市企画部文化局文化振興課

一九九一年 『沖縄県学童疎開者名簿―宮崎県学童関係諸令達通

牒―』 那覇市

琉球新報編集局学童疎開取材班

一九九五年 『沖縄・学童たちの疎開』 琉球新報社

沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室

一九九八年 『沖縄戦研究Ⅰ』 沖縄県教育委員会

三上謙一郎

二〇〇四年 『沖縄学童集団疎開 宮崎県の学事記録を中心に』

鉾脈社

沖縄県平和祈念資料館

二〇〇九年 「沖縄県平和祈念資料館 第十回特別企画展『イクサ

ユースワラビく戦時下の教育と子どもたち』」

志戸本耕道

二〇二〇年 『ふるさとの想い出写真集 明治・大正・昭和 小林』

(株) 国書刊行会

「陸軍北方部隊略歴(その七) 内地転用部隊ノ分割」 JACAR (アジ

ア歴史資料センター) Rec. C12122431700 陸軍北方部隊略歴(その

七) 内地転用部隊(1401頁～1551頁) 他戦域転用部隊(1601

頁～1614頁) その他の部隊(2011頁～2018頁) (防衛省防衛研  
究所)